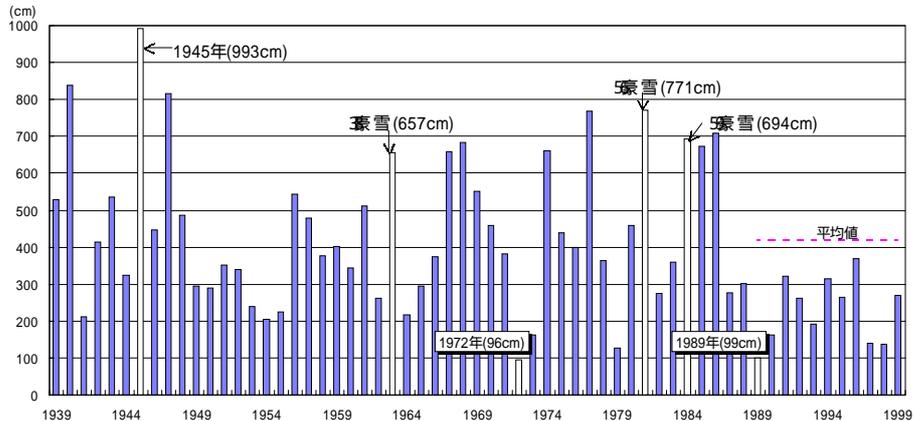


大雪と上空の気温

雪のあまり積らない冬

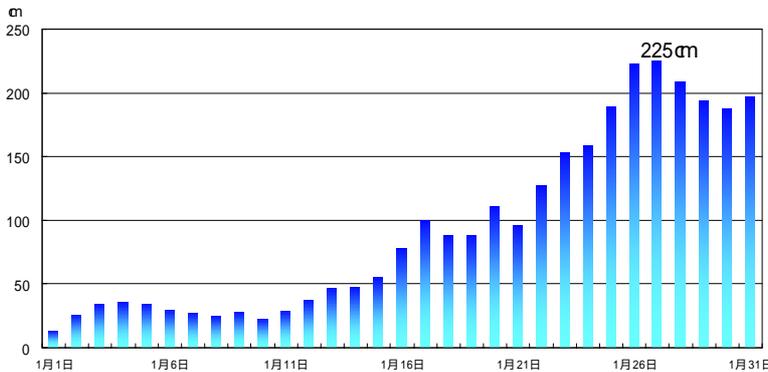
この頃といっても 1987年から14年間に、ひと冬に降る雪の量、降雪量が過去の平均を下回っています。このリーフレットを読まれる小中学生のみなさんに富山は雪国だといってもピンとこないかもしれません。気象台で観測された毎年のひと冬の降雪量（1939年から1999年まで）をグラフにしてみました。最も多かったのは1945年の993cm、少ない方では1972年の96cm、1989年の99cmが目につきます。積雪量の多少と平均気温の高低には関係があります。雪の多かった1945年は1月の平均気温は-1.0、一方雪の少なかった1972年は5.0、1989年は4.9もありました。グラフから最近では降雪量が少ないことほかに、降雪量の変化によいわれているような「18年ごとに大雪が降る」といった周期性は見られないことなどがわかります。



富山市の毎年の降雪量(1939年～1999年)

三八豪雪

1963年(昭和38年)1月の中旬にかけて北陸地方にたくさんの雪が降り各地で雪害が起きました。最深積雪は富山で18m、伏木で22mにも達しました。昭和38年に起ったので三八豪雪といわれています。下は高岡市伏木の1月の毎日の雪の深さのグラフです。1月1日には13cmしかなかった積雪が、中旬から増え始め、特に2日ころからは激しく増え、2日には22mにもなりました。道路は雪でおおわれ、家の二階から出入りしている人もいました。



1963年1月の伏木の毎日の積雪量



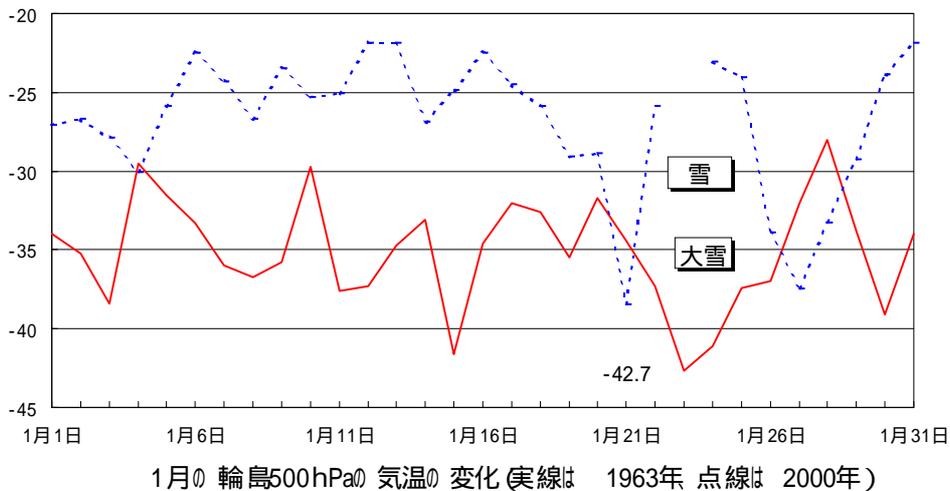
道路の雪は家の屋根近くまでありました

輪島上空5400mの気温は？

冬の天気予報の時間に「輪島上空400mの気温は××」という言葉をよく耳にします。これは石川県輪島の上空の気圧が500hPa(ヘクトパスカル)の高さでの気温をさしています。輪島の500hPaでの気温が-30より下がると雪が降るめやすになります。また-35より下がると大雪になることがあります。

下のグラフで実線は三八豪雪(1963年)点線は暖かかった2000年のそれぞれの1月の500hPaでの気温の毎日の変化をあらわしたものです。

2000年の1月は-30を下回る日は5日しかありません。一方1963年は気温が-30より高かった日は3日しかありませんでした。また下旬には、最低気温-42.7を記録した1月23日をはさんで、大雪になるめやすの-35を下回る日が一週間も続き、その間に積雪量は一気に増しました。



高層気象観測所

輪島では毎日午前9時(世界標準時の0時)と午後9時の2回測定器をつけた気球を上げて、上空の気温湿度風速風向を調べています。気球には水素ガスをつめて上げるのですが、上空へ行くにつれて気圧が下がるため気球は膨張しつづけてやがてはれつします。

輪島のような観測所を高層気象観測所といい日本には輪島をふくめて18ヶ所あります。なかでも日本海に突き出た場所に位置する輪島は、冬の高層気象観測の最前線となっています。富山からはわりと近いところがあるので興味ある方は出かけてみてください。

(吉村博儀)



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL.076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成12年12月1日